

This Page Is Inserted by IFW Operations
and is not a part of the Official Record

BEST AVAILABLE IMAGES

Defective images within this document are accurate representations of the original documents submitted by the applicant.

Defects in the images may include (but are not limited to):

- BLACK BORDERS
- TEXT CUT OFF AT TOP, BOTTOM OR SIDES
- FADED TEXT
- ILLEGIBLE TEXT
- SKEWED/SLANTED IMAGES
- COLORED PHOTOS
- BLACK OR VERY BLACK AND WHITE DARK PHOTOS
- GRAY SCALE DOCUMENTS

IMAGES ARE BEST AVAILABLE COPY.

**As rescanning documents *will not* correct images,
please do not report the images to the
Image Problem Mailbox.**

Abstract of JP 50-30223A

A hybrid vehicle is disclosed.

Fig. 1 shows an internal combustion 10, an electric generator 20, motor 30, a secondary battery 40, a planetary gear 50, a first mode change clutch 60, a second mode change clutch 70, and gears 22, 23, 31 and 33. There is also shown an oil pressure supplier 3 for operating the clutches.

In M mode, the clutches 60 and 70 are released. In this case, only the power of the motor is used to drive the vehicle. In M-E mode, only the clutch 60 is engaged and the clutch 70 is released. In this case, both the power of the internal combustion and the power of the motor are used to drive the vehicle. In E mode, the clutches 60 and 70 are engaged. In this case, only the power of the internal combustion is used to drive the vehicle.

The similar reference symbols as Fig. 1 are also used in the other figures.

In Fig. 3, a clutch 270 is provided between a carrier 251 of the planetary gear and a ring gear 254. The engagement of the clutch 270 causes an input shaft 201 and an output shaft 202 to be directly coupled.



特許願

(2000円)

昭和48年7月20日

特許庁長官 三宅 幸夫 殿

1. 発明の名称

複合電気自動車の変換装置

2. 特許請求の範囲に記された発明の要

3. 発明者

住所 愛知県豊田市平町4丁目48番地

氏名

田 井 敏 光

4. 特許出願人

住所 愛知県豊田市トヨタ町1番地

(名称)

(520) トヨタ自動車工業株式会社

代表者 豊田 章一郎

同席

5. 代理人

住所 東京都港区芝罘平町13番地 豊光ビル

電話 504-0721

氏名

弁護士 (6579)

竹 本

間

(外 3 名)

⑬ 日本国特許庁

公開特許公報

⑪特開昭 50-30223

⑫公開日 昭50.(1975) 3. 26

⑬特願昭 48-80723

⑭出願日 昭48.(1973) 7. 20

審査請求 未請求 (全10頁)

庁内整理番号

7052 51

⑮日本分類

80 A02

⑯Int. Cl?

B60L 11/02

明 細 書

1. 発明の名称

複合電気自動車の車体変換装置

2. 特許請求の範囲

太陽電池、キャパシタ及びリング車体の各回転要素から成る遊星歯車機構の一軸を第1切替クラッチを介して原動機側の出力軸側に連結し、その第2軸を発電機軸に連結結合しその第3軸を車両の推進軸側に連結した構成において、上記第3軸側に車体変換装置によって電動機軸を連結して電動機軸のみによるMモード運転系を形成し得ると共に上記発電機および電動機間に蓄電池とコンローラを配設してこれらを電気的に結合することによって原動機間と電動機による複合回転運動を可能なM・Eモード運転系を形成させ、更に上記第3軸上か又は第1軸と第3軸間に第2切替クラッチを設けしめることによって原動機によるEモード運転系を形成するようにしたことを特徴とする複合電気自動車の車体変換装置。

3. 発明の詳細な説明

本発明は複合電気自動車の車体変換装置に関するものである。ガソリンエンジン・ディーゼルエンジンによる自動車の排気ガスは大気汚染の一原因であるとして、マッサー・エンジンに於ける如く排気ガス規制が厳しくなりつつある。そこで排気ガスを発生せずに走行できる電気自動車が開発されてきているが、一充電走行距離が短く、重量が大きく、欠点によりまだ従来の内燃機関に比べてかかるまで圧迫していない。そこで内燃機関と蓄電池を併用してあるときは蓄電池で電動機を駆動し(以後Mモードと呼ぶ)、あるときは内燃機関、電動機双方で駆動しそのとき内燃機関の動力の一部を発電機で電気エネルギーに変換して蓄電池を充電し(以後M・Eモードと呼ぶ)、またあるときは内燃機関のみで駆動(以後Eモードと呼ぶ)して走行できる複合電気自動車が注目されてきている。すなわちこのM・E・Eモードの各モードを都市内、郊外等で使い分けることによって排気ガスが特に問題となる場所ではそれを低減しようというものである。

この複合電気自動車に関する歯車伝動装置についてはいくつかの公知技術が教示されるが比較的複雑な歯車伝動装置を用いているのでクラッチの数が多くなってしまうもの、あるいは全く単純な蓄電池と内燃機関の複合方式であるため電動機に大きな負担がかかるもの等に止まり満足できないものは少い。

本発明は上記公知技術の欠点を鑑み、改良された複合電気自動車の歯車伝動装置を提供するものである。すなわち本発明の目的は歯車機構の連続構成が比較的簡単でありまたクラッチ等摩擦係合装置も比較的少く、簡単な構成でしかも良好に作動する複合電気自動車の歯車伝動装置を提供することである。本発明に係る歯車伝動装置を用いれば電動機は常に電動機として、発電機は常に発電機として作動するのでコントロールの負担が少く、また完全な無段変速が可能であり時にB₁、M₁、M₂各モードをそれぞれの運動態様に従って使い分けられる利益がある。そして動力伝達効率を上昇させるためにオーバードライブさせることも

特図 50-20223(2)
可能であり、走行速度が上昇するほど動力伝達効率は上昇ししかもMモードにしたときに最高の動力伝達効率となるので安定高速走行が可能である。

本発明に係る歯車伝動装置の構成について図附図面により詳細に説明する。各実施例を第1図から第4図に示したが、第2図以降の実施例の基本的な構成は第1図のそれと類似しているもので主として第1図について説明し、その他に関しては若干の補足を加える。まず第1図を参照されたい。

内燃機関10のクランク軸に連結した歯車伝動装置の入力軸1があり、これは第1モード切替クラッチ40を介して中間軸4に連結される。この入力軸1には歯車ポンプ等の油圧供給源5があり、内燃機関10の動力の一部で油圧を発生させてクラッチ等の係合を為す動力源となる。内燃機関10の動力によらずに別の小駆動機により走行中常に一定油圧を得る方法もあり、この場合には内燃機関10が停止していても常に油圧を発生できる利点がある。

中間軸4は遊星歯車機構50の遊星歯車53を

図面直に軸突するキャリア51に一体的に結合されており、遊星歯車53と啮合う太陽歯車52は中空回転軸の末端に一体的に取付けられている。そしてこの中空回転軸の末端は多岐式変速用ブレーキを構成する第2モード切替クラッチ70の回転可能な摩擦板72に結合され、一方クラッチ70の固定摩擦板71はケースに固着されている。従って油圧によって第2モード切替クラッチ70が係合されると中空回転軸5はケース73に対し固定状態となる。この中空回転軸5にはスプライン嵌合された歯車25があり、この歯車23に啮合う歯車22の回転軸21は発電機20の軸となっている。遊星歯車機構50のリング歯車54は出力軸2上に取付けられ、この出力軸2上には歯車53がスプライン嵌合し、これに啮合う歯車52を介して電動機50と連結している。一方において、電動機50と発電機20とはそれぞれ蓄電池40を介して電気的に関係づけられる。すなわち配線45、44は励磁回路に接続されており、コントロール41、42は励磁電流を制御する。一方

配線44、45は蓄電池40、発電機20、電動機50間の電力の受け渡しをする。

次に第2図の実施例について説明する。なお、第1図の実施例と同一の部品に関しては同じ参照番号を用いている。(以下第4図まで同様である。)

第1図と異なる点は遊星歯車機構44が2列で構成されていることである。すなわち前記遊星歯車機構のリング歯車154は後列遊星歯車機構の遊星歯車157を軸突するキャリア155と一体になっており、しかもこれは出力軸102と連結している。また後列遊星歯車機構のリング歯車158は常にケース171に固着されている。そしてこの太陽歯車156と一体に結合した歯車153に啮合う歯車152の軸は電動機150と一体的に結合している。

次に第3図の実施例を説明する。第1図の実施例では発電機20と連結する遊星歯車機構の太陽歯車52は一端をケース73に固着した第2モード切替クラッチ70に連結されていたが、この実施例では第2モード切替クラッチ270は遊星歯

車横側のキャリア251とリング歯車254の間、言い換えれば中間軸204と出力軸202の間に設けた点と異っている。第2モード切替クラッチ270を係合させれば中間軸204と出力軸202は一体となる。

次に第4図について説明する。この実施例では中間軸304は遊星歯車機構350の遊星歯車を軸支するキャリア354と一体的に連結している。リング歯車353は中空回転軸305と連結されておりこれに歯車323がスプライン係合されている。さらに歯車322を介して発電機320と連結されている。また第2モード切替クラッチ370は遊星歯車機構350のリング歯車353に連結されており、太陽歯車351は出力軸502と連結されている。

次に第5図の実施例を説明する。この実施例では遊星歯車機構450が2重遊星歯車で構成されている点が前記各実施例と異っている。中間軸404はリング歯車454と連結しており、太陽歯車451は第2モード切替クラッチ470と連

結して、2重の遊星歯車452、453を軸支するキャリア455は出力軸402に連結されている。

最後の実施例である第6図でも第5図と同様に2重遊星歯車を使用している。中間軸504はリング歯車554を連結し、太陽歯車551は出力軸502と連結している。2重の遊星歯車552、553を軸支するキャリア555は中空軸505を介して第2モード切替クラッチ570に連結され、この中空軸505に歯車523、522を介して発電機520が連結している。

以上本発明の歯車伝動装置の構成について説明したが、次いでその作動様子を詳細に述べる。各実施例について基本的な動作は類似する点が多いので主として第1図の実施例を中心として説明し、他の実施例については異なった動作をするものについてのみ記載する。

再び第1図を参照されたい。前述の如く本発明によつてM、M-E、Eの各モードをとることが可能である。すなわち油圧供給係3から油圧を制

御回路(図示せず)を通して第1モード切替クラッチ60、第2モード切替クラッチ70に選択的に供給し或は排出してそれらの係合、解放によつて下表の如くM、M-E、E各モードをとることができる。

Mモード M-Eモード Eモード

第1モード切替クラッチ60	X	○	○
第2モード切替クラッチ70	X	X	○
○ 係合			
X 解放			

上表のごとく、クラッチ60、クラッチ70をとにも解放した状態ではMモードになる。内巻機10は出力軸2と完全に切離されているので電動機30の駆動力のみで車両を駆動するわけである。また内巻機10と発電機30の間も切離されているので、Mモードにおいては走行中発電機30によって蓄電池40を充電することは不可能である。しかし停車時に出力軸2を停止させておいてクラッチ60を係合させ内巻機10の動力で発

電機20を駆動し蓄電池を充電させることは可能である。

Mモードによる走行はコントローラ2による電動機30の回転数制御によつて行なわれる。すなわち歯車32、55を介して出力軸に對じトルクを増大させて走行する。

第7図にMモードでの電動機回転数と車速の関係を示す。この関係は直線的でその傾きは歯車32と歯車35の歯数比に高づくものである。この歯数比を変化させることによつて車速を上昇させることは可能であるが、実際上ある程度以上にするのは困難である。そこで歯車を2段にして歯数比を充分大きくするようにして電動機30を低トルクで高回転のものを使用可能にしたのが第2図の実施例である。前述の如くこの実施例では電動機10と出力軸102の間には歯車132、135に加えて遊星歯車機構100が一段設けられている。しかもリング歯車158は常にケースに固定され歯車153と太陽歯車156は一体であるから、

$$f = \frac{\text{歯車 153 の歯数}}{\text{歯車 152 の歯数}}$$

$$P = \frac{\text{太陽歯車 156 の歯数}}{\text{リング歯車 158 の歯数}}$$

とすれば電動機 150 の回転トルク T_M に対して出力軸の回転トルク T_0 は

$$T_0 = f \times \frac{1+p}{p} T_M$$

となり第 1 図の実例例に比して $(1+p)/p$ 倍だけ回転トルクを上昇させるわけである。また電動機の回転トルク T_M はコントローラ 42 により防浪電流を変化させれば変化させることができ、したがって T_0 も T_M に応じて制御されることになる。

M モードに関して第 5 図から第 6 図の各実例例の歯車伝動装置は第 1 図の実例例と類似の原理で作動する。

再び第 1 図を参照されたい。ここまで説明した

M モードにおいて内燃機関 10 の回転速度と出力軸 2 の回転速度の比 ϕ に対する発電機 20 および電動機 30 の内燃機関 10 に対する各回転速度比 ϕ_g, ϕ_m との関係を図 8 に示す。M モードに移った時点 (モード交換点と呼ぶ) の速度比を ϕ^* とするとそのときの発電機 20 の回転速度比 ϕ_g は B 点で示される。一方電動機 30 の速度比 ϕ_m は A 点で示される。これら速度比は内燃機関 10 の回転速度に対する比であるから、前述の如くキャブプレートの送り弁によって内燃機関 10 の回転速度を一定にしておけば各速度比はそのままで電動機、発電機および出力軸の回転速度に対応する。

上記モード交換点よりコントローラ 41, 42 を制御して ϕ を徐々に大きくしてゆけば、第 8 図に示す如く電動機 30 の回転速度の増大にしたがって、リング歯車 55 とキャリヤ 54 の間の差動的回転によって太陽歯車 52 に連結した発電機 20 の回転速度は徐々に減少してゆく。すなわち ϕ を増大させるにしたがって歯車伝動機構において駆

特開 昭 50-30223 (4)

M モードでは第 1 モード切替クラッチ 60、第 2 モード切替クラッチ 70 共に解放状態であったが次に内燃機関 10 を回転させておいてクラッチ 60 のみ係合させクラッチ 70 を解放状態に保つ。このときには内燃機関 10 と出力軸 2 は遊星歯車機構 50 を介して連結されしかも電動機 30 の動力も出力軸 2 に加わるから、全体として内燃機関と電動機の動力は複合伝達される。この状態は M モードであり、この M モードでは内燃機関 10 の動力の一部が遊星歯車機構 50 の太陽歯車 52 から分送して歯車 25, 22 を介して発電機 20 を駆動する。すなわち発電機 20 により電気的エネルギーに変換されコントローラ 41 で制御される蓄電池を充電する。電動機 30 は蓄電池の電気エネルギーによってコントローラ 42 で防浪電流を制御することによって駆動される。一方キャブプレート送り弁の開度を一定にすることにより内燃機関 10 の出力を一定に保持しておいて、電動機 30 の回転速度の急な制御によって出力軸 2 の回転速度を変化させることが可能である。

動力に占める内燃機関 10 の占める割合は増大し、電動機 30 の占める割合は減少してゆく。 $\phi = \text{Max}$ (最大速度比と称する) になると発電機 20 は全く回転を停止し、一方電動機 30 は最大の回転速度となる。ただしこの場合電動機 30 はその回転速度は大きくても駆動力としてはほとんど等になり、内燃機関 10 のみによって駆動されていることに注意する必要がある。またこのとき伝送する如く入力軸 1 と出力軸 2 の間でオーバードライブが達成するべき歯車網になっていることにも注意する必要がある。

$\phi = \text{Max}$ の時点では前述の如く遊星歯車機構 50 の太陽歯車 52 は停止するのでこのとき第 2 モード切替クラッチ 70 に油圧を供給しこれを係合させる。クラッチ 70 のブレーキ作用によって発電機 20 は全く作動しなくなり、また蓄電池 40 から電動機 30 への電気エネルギーの供給も断たれ、電動機 30 も自由回転しているだけなので内燃機関 10 によって純機械的に出力軸は連結され駆動される。すなわちこれが R モードである。このと

き前述の如く

$$\rho = \frac{\text{太陽歯車の歯数}}{\text{リング歯車の歯数}}$$

とすれば

$$\text{速さ比} = \frac{1}{1+\rho}$$

となり回転速度比としては1+ ρ のオーバードライブが達成される。

ここで0と動力伝達効率の関係をとったものを第9図に示す。 ω^2 の時点までは第1モード切替クラッチ40が係合していないので電動機20の駆動力の増大と共に動力伝達効率は上昇する。M-Eモードに移る時点 ω^2 で動力伝達効率が不連続になるのはクラッチ40の係合によって発電機20へ駆動力が分流するからであり、その後は ω の増大と共に発電機20へ分流する駆動力は減少し動力伝達効率は上昇する。 ω_{max} では発電機20の回転は全く停止し損失は純機械的なものと

なり動力伝達率は最大となる。以上のことは第2図および第4図から第6図の実施例においても第1図の実施例と類似である。

しかし第3図の実施例はそれらと若干異った作動をするので説明を加える。第3図の実施例では前述の如く第2モード切替クラッチ270はその一端でケースに対し固着されておらず、中間軸204と出力軸202の間にある。このクラッチ270は入力軸201と出力軸202の間を機械的に直結させるためのものである。すなわちクラッチ270を係合させると遊星歯車機構250は入力軸201と一体になって回転し入力側の駆動力は出力軸へ直結される。ここで同時に電動機250への電気エネルギーの供給を絶てばこれが第3図の実施例におけるEモードとなる。この場合クラッチ270にブレーキ作用はなくクラッチ270を係合させても発電機20は回転したままである。さらに車速を上昇させるためには、第2モード切替クラッチ270を解放し、遊星歯車機構250におけるリング歯車254とキャリア

251の間の遊動回転によって発電機220がさらに減少するように電動機250を回転させてオーバードライブ状態を達成せねばよい。

第3図の実施例での動力伝達効率を第9図に示す。 $\omega=1$ の時点で動力伝達効率が特異点となるのがこの実施例で特異点になっている点である。

これまで本発明の歯車伝達機構についてその構成、作動態様を説明したが次に実際の走行中でのM、M-E、E各モードの使用、切替の態様を説明する。

Mモードは低速域すなわち車両のスタート時からある程度の車速になるまで用いる。また内燃機関は完全に停止しており、排気ガスは全く発生しないから、都市内走行など低速で充分でしかも排気ガスの規制が厳しい場所でも連続的に用いるのにも適している。また電動機の回転方向をコンローラで逆回転させれば後進可能になる。

都市内でMモードで走行し郊外に出てM-Eモードに切替えるときにはまず内燃機関を始動させる。内燃機関10の動力によって入力軸1が回転

し、ポンプ5は油圧を発生する。この油圧によって第1モード切替クラッチを係合させる。このとき予め設定した内燃機関の回転速度まで一気に上昇させる。このモード切替時点を設定した速度比とするなら、その時の内燃機関の回転速度は一定的に決るから、そのまま上昇させるように制御系で制御する。これによって電動機に回転速度変化を与えることなく連続的にM-Eモードに移ることができ、一度M-Eモードに入ってしまったら、相当低速まではMモードに戻らないようにする制御系は実用上取捨が必要がある。

M-Eモードでは、発電機はコンローラ11で制御されつつ発電作用を為すが、Mモードにおいても蓄電池を使用するのであるから発電機の性能は適切なものを選ぶ必要がある。また公害対策上内燃機関は最も排気ガスの少ない回転速度で一定にしていくという方法は極めて有効である。

M-EモードからMモードの切替時には、まず第1モード切替クラッチに加わっている油圧を排出して解放状態にし、次に内燃機関を停止させ

ば良い。

M→EモードからEモードへの切替時には、発電機が停止した時点を感じて第2モード切替クラツチを係合させれば良い。Eモードは高速道路等で高速、一定の走行に達している。このとき曲車伝動装置の動力伝達効率是最高であるから経済的走行が可能である。

その他本発明によれば、コントローラによって電動機の回転速度を連続的に変化させて完全な無段変速走行を為すことができるという利点もある。

4. 図面の簡単な説明

第1図は本発明の第1の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第2図は第2の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第3図は第3の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第4図は第4の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第5図は第5の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第6図は第6の実施例を示す曲車伝動装置の概略図、第7図はMモード時の電動機回転速度と車速の関係、第8図は入、出力軸の回転速度比と、入力軸と電動機

特開 昭50-30223 図
および発電機の回転速度比 ω_m/ω_p の関係図、第9図は第1図、第2図、第4図から第6図の各実施例の曲車伝動装置における入、出力軸回転速度比と動力伝達効率の関係図、第10図は第3図の実施例の曲車伝動装置における入、出力軸回転速度比と動力伝達効率の関係図。

1.....入力軸、 2.....出力軸、 3.....油圧ポンプ、 4.....中間軸、 5.....中空回転軸、 10.....内燃機関、 20.....発電機、 30.....電動機、 40.....蓄電池、 41, 42.....コントローラ、 50.....遊星歯車機構、 60.....第1モード切替クラツチ、 70.....第2モード切替クラツチ。

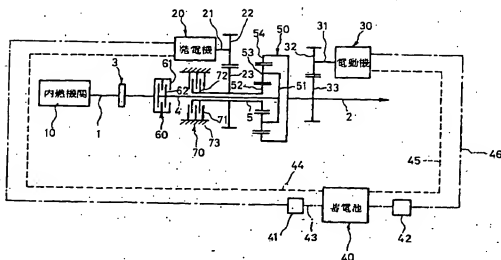
特許出願人

トヨタ自動車工業株式会社

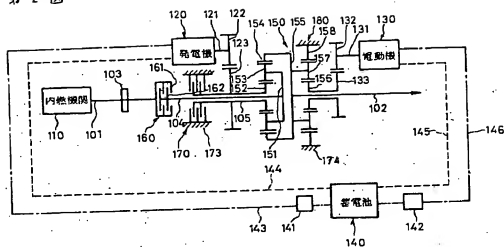
特許出願代理人

弁理士 青 木 朋
弁理士 西 條 和 之
弁理士 吉 田 正 行
弁理士 山 口 昭 之

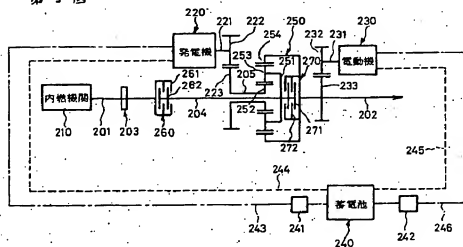
第1図



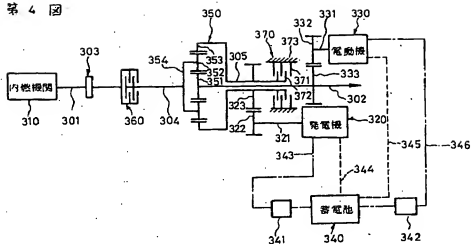
第 2 図



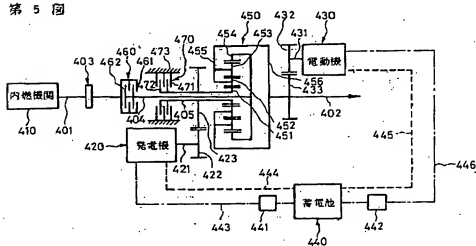
第 3 圖



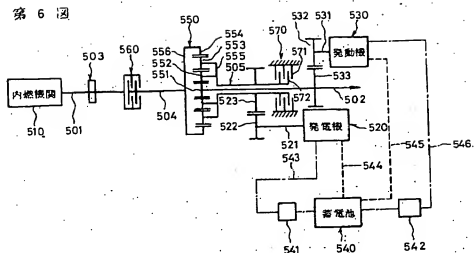
第 4 図



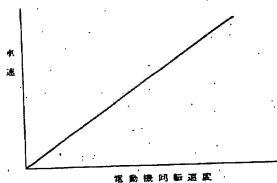
第 5 図



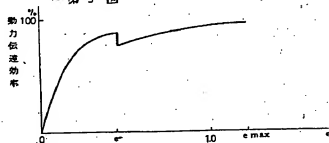
第 6 圖



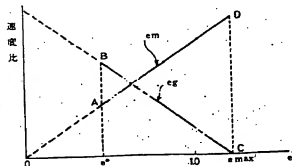
第 7 圖



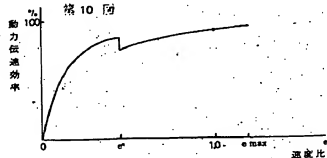
第 9 圖



第 8 圖



第 10 圖



6. 添附書類の目録

(1) 願 書 調 本	1 通
(2) 明 細 書	1 通
(3) 図 面	1 通
(4) 委 任 状	1 通

7. 前記以外の発明者、特許出願人または代理人

(1) 発 明 者

な し

(2) 特許出願人

な し

(3) 代 理 人

住所 東京都港区芝罘平町13番地静光虎ノ門ビル

電話 504-0721

氏 名 井理士 (7210) 西 館 和 之 三

住 所 同 所

氏 名 井理士 (7397) 吉 田 正 行

住 所 同 所

氏 名 井理士 (7107) 山 口 昭 之